五島慶太翁 生誕130年記念誌 熱誠 ついに刊行!!

都市大グループの祖・五島慶太翁の教育への情熱・哲学・思想にふれる

昨年、2012（平成24）年4月18日は、学校法人五島育英会の初代理事長である五島慶太翁の生誕130年目に当たります。そこでこれを機に、慶太翁の記念誌「熱誠」を刊行することとなりました。

この記念誌は①教育事業を中心に昭和14年から逝去する昭和34年の20年間に焦点を当てる、②慶太翁の偉業・人物の紹介として回顧談や体験談を掲載し、教育事業以外でも壮大な夢を見続けた事業家慶太翁を浮き彫りにする、③読みやすい体裁にするためA4サイズにし、写真を豊富に入れ興味や印象を深めるようにする、④親しみやすい工夫としてコラムをつくり、理解を深めるため、慶太翁にまつわる関連記事を掲載し、点から線、そして面へと多面的に記述する、などを編纂方針としています。

このような方針のもと、昨年より1年余りを経て制作された記念誌「熱誠」は、436ページにおよび、上製本による仕上がりで、大変貴重な写真や文献が満載された資料的価値の高い刊行物となり、今年の7月中には各学校に配付される予定です。

ぜひ多くの方々に、五島慶太翁の教育概史としてお読みいただき、東京都市大学グループの祖を身近に知っていただければ幸いです。

主な目次

序　五島慶太翁が描いた夢の舞台の幕が上がった
第１部　五島慶太翁の教育事業
　第１編　東横学園（1937～1957）
　第２編　武蔵工業大学前史（1929～1954）え
　第３編　五島育英会発足と慶太翁の業績（1955～1967）
　第４編　慶太翁の夢を追う（1968～）
第２部　五島慶太伝

「熱誠」ページ見本

五島慶太翁生誕130年記念誌編纂委員会

（平成24年10月1日設置）

委員長	専務理事	國分 榮
副委員長	常務理事	広江 秀夫
委員	東京都市大学学長	中村 英夫
〃	東京都市大学大学院工学研究科長	片田 敏行
〃	東京都市大学共通教育部長	浅野 鉦世
〃	東京都市大学付属中学校・高等学校校長	小野 正人
〃	東京都市大学等々力中学校・高等学校校長	原田 豊
〃	東京都市大学塩尻高等学校校長	赤羽 利文
〃	東京都市大学付属小学校校長	重永 睦夫
〃	東京都市大学二子幼稚園園長	波田野 久美子
〃	東急自動車学校校長	白石 明
〃	理事　法人本部総務グループ担当	橋本 昌彦
〃	法人本部総務グループ計画担当部長	上倉 信介
〃	法人本部総務グループ専任部長［計画担当（教育）］	島巡 陽一
〃	法人本部総務グループ課長［計画担当（総務）］	新堂 孝

「熱誠」編纂にあたって

東京都市大学グループの祖・五島慶太翁は、1882（明治15）年４月18日、長野県小県郡青木村の小林菊右衛門の二男として誕生した。2012（平成24）年は生誕130年にあたる。

慶太翁は、学校を一つの理念で統一化を図るのではなく、各学校の生い立ちや教育文化を継承しつつ尊重し、大きな包容力をもって学校経営に当たられた。校章・校旗・校歌など多様性を認め、順次、教育環境の整備充実・拡張に力を注がれて、今日の幼稚園から大学までの一大総合学園の礎を築きあげられたのである。

私学の良さ・強みは、創立者の確固たる建学精神があり、その上に歴史・文化が継承され、伝統となっている点にある。それは私学の誇りであり、かけがえのない特色でもある。しかしながら、慶太翁が逝去されてから既に半世紀以上も経過した現在、慶太翁の胸像がある学校でも、多くの学生・生徒は、慶太翁の人物像を知らない。五島をもじった「強盗」の異名をもつ剛腕実業家としての知識や、目蒲電鉄という小さな会社から東急グループという一大企業グループに導いた傑出の偉業を知る一部の保護者でさえも、慶太翁が英語教師や運輸通信大臣の重責を果たされたことや、慶應義塾大学への土地無償提供をはじめ東京学芸大学、旧都立大学などの東急沿線への学校誘致など、他法人の教育事業の推進にもご尽力されたこと、また、茶に親しみ、国宝級の古写経・古文書・仏像・茶道具・歌切・絵画などを精力的に収集された文化人、あるいは「ポケット菜根譚」や「我説観音経」を著した優れた教養人としての人物像までは知るところではない。これら創立者慶太翁の偉業は、学校関係者が努めて伝えていかないと風化してしまうものである。

かつて、五島育英会では、慶太翁生前の1958（昭和33）年に、生徒向けの小型本「五島慶太の生い立ち」を刊行したが、学生・生徒が身近に閲覧できる環境にはない。五島慶太翁の伝記を作ってほしいという要望は、以前より各学校から上がっていた。このような背景から今般、生誕130年を記念して、五島慶太翁生誕130年記念誌編纂委員会が設置され、生徒向け教育読本と、併せて慶太翁の教育事業を中心とした本誌を編纂することになった。そして、本誌のタイトルは「熱誠」とした。これは慶太翁が東横青年学校、東横家政女学校を開校し、「我が半生の体験を語る」と題して、1937（昭和12）年６月に新入社員の訓話をされた際、最後に人生訓として、人の成功と失敗のわかれ目は、第１に「健康」で、次には「熱と誠」であると結んでいることによる。「熱誠」は、慶太翁の生き方そのものを象徴した珠玉の言葉である。また、本誌題字は書道家佐野梨山（毎日書道展審査員、東京都市大学等々力中学校・高等学校前教頭佐野守正）先生による。

本誌はこのような共有意識を持ち、編纂し完成したものである。編纂に当たっては東京急行電鉄などの多くの関係機関・部署にご協力いただいた。

なお、編纂作業は、資料整理や校正等に思いのほか時間がかかってしまった。これも慶太翁の教育事業の情熱を、広く深く掘り下げて今に伝えたかったからである。

平成25年６月１日
五島慶太翁生誕130年記念誌編纂委員会委員長　國分 榮